



Data

監督・脚本・編集・絵: 池田暁
出演: 前原滉/今野浩喜/中島広稀
/清水尚弥/橋本マナミ/
矢部太郎/片桐はいり/嶋
田久作/きたろう/竹中直
人/石橋蓮司

👁️👁️ みどころ

今年のアカデミー賞では、『ノマドランド』(20年)と『ミナリ』(20年)の“頂上決戦”が見もの。両者ともシリアスながら、わかりやすく人間の生きざまを考えさせる名作だが、映画はアイデア! そんな視点からは、セリフの棒読みから始まる、奇妙なタイトルの本作は興味深い。

ヒトラー率いるナチス時代のドイツ国民と同じように、「天皇陛下、万歳!」と叫んで死んでいった戦前の日本国民は“思考停止状態”だったが、平和憲法に守られ、戦後76年間も戦争と縁のないまま生きてきた今の日本国民も、ほとんど“思考停止状態”?

本作はそんなズキリ!とするテーマに肉迫! そんな期待にピッタリだが、残念ながら脚本はイマイチ! しかし、問題提起の視点は良し! 練度を向上した次作に期待したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 奇妙なタイトルに注目! セリフは棒読み! こりゃ一体? ■□■

本作は第21回東京フィルメックスで審査員特別賞を受賞した、池田暁監督の長編第4作だが、『きまじめ楽隊のぼんやり戦争』って一体ナニ? この奇妙なタイトルは何を意味しているの? 私は予告編を数回観たうえ、それなりの事前情報を持っていたから、冒頭に登場する4人の“きまじめ楽隊”と、主人公らが暮らす津平(つひら)町の一日の姿を見て“きまじめ楽隊”と“ボンヤリ戦争”の“実態”を少しは把握することができた。しかし、事前情報なしで本作を観れば、何じゃこの奇妙な映画は! ? そういう違和感でいっぱいになるはずだ。

本作の主人公・露木(前原滉)は、楽隊が奏でる音楽で目覚め、身支度をして仕事場に向かう日常だが、4人の楽隊の動きが変なら、露木の動きも変。それ以上に変なのは、次々

に登場してくる津平町の人々の動きだが、なぜ彼らはこんな動き方を？そしてまた、なぜこんな抑揚のない棒読みの喋り方をしているの？こんなセリフ回しならプロの俳優でなくても出演できそうだが、本作で町長の夏目を演じる石橋蓮司は演技派。また、物知な煮物屋店主・板橋を演じる嶋田久作も、気まぐれな定食屋店主・城子を演じる片桐はいりも、超個性的な演技派だ。そんな演技派俳優に、あえて本作のようなセリフの棒読みを強いているのは、もちろん池田暁監督だが・・・。

■□■津平町の1日は？ここの住民はみんなヘン？■□■

津平町の住民は揃いも揃ってヘンだが、それはスクリーンを観ている我々が勝手にそう思うだけで、きっと本人たちはそう思っていないはず。露木も同僚の藤間（今野浩喜）も勤務先は津平町の第一基地。本作導入部では、朝9時から始まる2人の丸1日の“仕事”が描写されるので、それに注目！「では、作業を始めてください」の掛け声から始まる彼らの仕事は、姿勢を低くとって銃を構え、太津（たづ）川の向こう側に向かって撃ち続けることだが、彼らはなぜ毎日そんな仕事を？

露木と藤間は昼休憩ではいつも近くの定食屋で昼飯を食べているが、そこには「うちの息子は優秀な兵隊さんだからね」という“自慢話”をネタにしている店主・城子（片桐はいり）が登場。また、露木は帰り道ではいつも板橋煮賣店で夕食の買い物をしているが、そこでは情報通の板橋（嶋田久作）からさまざまな情報が入ってくる。さらに、ストーリーが進んでいく中で、新たに“技術者”として第一基地にやってくる仁科（矢部太郎）や、煮物泥棒の三戸（中島広稀）、そして町長の息子の平一（清水尚弥）等が登場し、次々と面白い物語（エピソード）を展開していくので、それに注目！

このように、津平町の住民は揃いも揃ってヘンな奴ばかり。そして、この町での1日は、一方では“戦時中”という緊迫感もあるが、他方では“戦時中”とはいえ、のどかな面も……。これは、「朝鮮戦争」が今なお終戦せず、北朝鮮と“停戦状態”にある韓国の1日と同じようなもの・・・？

■□■興味の継続は？ワンパターン？チャップリンとの比較は■□■

もっとも、本作の“奇妙さ”は冒頭から導入部、更に中盤を通じてすべてワンパターンだから、冒頭と導入部ではそれに引き込まれたが、中盤になると少し飽きてくる。ちなみに、4月2日付日経新聞夕刊で、本作を星二つと低評価している宇田川幸洋（映画評論家）は、一方で「淡々と、架空のまちの戦時の日常がつかみかさねられる。グロテスクに誇張された小津映画とでもいった趣き。美術と撮影からくる、つげ義春のともいえる雰囲気には魅力もある」と書きながら、他方で「だが、登場人物の様な機械人形化は、見ていてたいくつであり、そのくりかえしに苦痛すら感じてくる」と書いているが、私もそれに同感だ。また、『キネマ旬報』4月下旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」では、詩人、映画監督で私と同じ1949年生まれの前田健二氏も星2つの低評価で、「笑えなかった」、「池田ワールド。そう言うテイストの徹底ぶりは認めたいが、頻出する食べ物の扱い方が

気色わるい」と書いている。

本作の池田暁監督は脚本・編集・絵も担当し、フル活躍しているが、本作における彼の最大の功績はアイデア。彼の頭の中に生まれたアイデアが『きまじめ楽隊のぼんやり戦争』というタイトルに結実しているわけだ。冒頭に見る奇妙な楽隊の姿と、導入部で見る津平町の1日の姿、そして、その中で暗示される川の向こう側の太原町の脅威を感じ取ることができれば、本作の面白さに身を乗り出してしまうはず。しかし、本作ではその面白さが長続きせず、登場人物たちの奇妙な動きにも飽きてしまうからそれが残念！

ちなみに、無声映画時代のチャップリンの名作は、俳優・チャップリンの奇妙な動きに全く飽きがこないうえ、面白いストーリーが次々と展開していくから、今日まで“名作”と評価されているわけだ。それに比べると、明らかに本作はストーリー構成がイマイチだ。

■□■太津川の向こう側は？私の第1の疑問は？■□■

本作で途中から気になるのは、太津川の向こう側はナニ？ということ。川の向こう側は太原（たわら）町だが、そこにはどんな人たちが住んでいるの？町長は、「今日も向こう岸からの脅威が迫ってきています！どんな脅威かは忘れましたが、皆さん、とにかく頑張りましょう！」と訓示していたが、川の向こう側の脅威の具体的な内容は全くわからない。また、城子も盛んに戦いが激化している川上にいる息子の自慢話をするものの、その戦いの具体的な内容はさっぱりわからない。韓国と北朝鮮に分断された朝鮮半島では、韓国側から見る北朝鮮の脅威は具体的だが、本作ではそれがサッパリわからないところがミソだ。ナチス・ヒットラーの暴虐ぶりを特集したBS1の番組『映像の世紀』（95年～96年）を観れば、ヒットラーがユダヤ人の脅威を強調することによってドイツ国民の対抗心を高め、一致団結させたことが明らかだが、さて、津平町は太津川向こう岸にある太原町のどんな脅威に備え、日々戦争をしているの？

本作のストーリー構成（脚本）には疑問点がたくさんあるが、その第1は、本作中盤、突然主人公の露木が楽隊への転勤を命じられること。今日の戦争（仕事）を終え、帰り支度をしている露木がいきなり上司の川尻から「露木くん、明日から楽隊ね」と言われたところから後半の奇妙なストーリーに移行していくわけだが、そもそもなぜ露木は第一基地勤務の兵隊から楽隊院に転勤させられたの？それがサッパリわからないうえ、本作ではそれを説明しようとする意欲は全く見えないから、私にはアレレ・・・。

■□■負傷兵は？泥棒は？町長の息子は？女性は？■□■

本作のストーリー構成（脚本）についての私の疑問はたくさんある。それらはすべて、第1の疑問の続きともいえるもので、具体的には①川の向こうからの敵の弾で右腕を負傷した藤間のその後の扱い、②煮物泥棒で逮捕された三戸は兵隊にさせられて冷遇されるのに対し、同じ漬物泥棒として逮捕されるべき平一は、町長の息子だからという理由だけで警官に出世すること、③津平町では町長が帰庁する際に川尻の妻・春子（橋本マナミ）と見知らぬ女がお見送りをする習慣があるところ、ある日、町長が川尻に「何だ。奥さん代

えたのか？」と質問し、「はい、子供ができないもので」と答えた川尻に対して「じゃあ仕方ないね」と言って、その後、いとも簡単に川尻の妻が変わること、等だ。

『パラサイト 半地下の家族』(19年)、『シネマ 46』14頁)は韓国社会の格差問題に鋭いメスを入れた問題提起作だったが、日本でも格差と安倍政権・菅政権を批判する声が喧しい。池田暁監督が本作に上記のようなストーリー(エピソード)を盛り込んだのは、そんな日本社会の流れに沿ったものなのかもしれない。ちなみに、町長の息子のエピソードは、ひょっとして東北新社に勤務する菅総理の長男と総務省幹部の接待問題を皮肉ったもの?また、春子へのあり得ないような女性差別のストーリーは、森喜朗元東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会会長の女性蔑視発言への当てつけ?この問題は両者とも、本作が製作された後に発生したものだから、それはあり得ないが、なぜ本作に上記のようなストーリー(エピソード)を盛り込む必要があったの?

■なぜ「美しき青きドナウ」をトランペットで?■

本作後半は、露木が転属させられた伊達(きたろう)率いる“きまじめ楽隊”のストーリーがメインになっていく。津平町の住民は今の日本国民と同じように“思考停止状態”にあるが、それは“きまじめ楽隊”も同じ。さらに、町長はもとより、煮物屋店主の板橋と定食屋店主の城子を典型として、津平町のほとんどの住民は“思考停止状態”にあるが、そんな中、唯一人「なぜ・・・?」「どうして・・・?」と本作全編を通して素朴な質問をするのが、主人公の露木だ。

そんな露木には、川上の戦争で奮闘している息子のニュースばかりに一喜一憂している城子たちと違って、ほんの少しの“真実”が見えてくるらしい。その1つが、家の前で露木の耳に聞こえてきたかすかな音(音楽)を頼りに、川のほとりに行く中で露木の耳にハッキリ聞こえてきた川の向こう岸からのトランペットの音色だ。そのトランペットを吹いているのは、向こう岸にかすかに見える女性・・・?もしそうなら、同じ曲をこちら側から向こう岸に向けて吹いたら、反応してくるのでは・・・?これは、素朴な質問をすることに躊躇しない露木なればこそその発想だったが、実際に、露木の耳に入ってきたヨハン・シュトラウス2世の「美しく青きドナウ」を露木が向こう側に向かってトランペットで吹いてみると・・・?3月13日観た中国映画『八百(The Eight Hundred)』(20年)では映画終了後、字幕と共に流れてきた曲が「ダニー・ボーイ」だったことにビックリさせられたが、本作はなぜ「美しく青きドナウ」なの?北朝鮮と韓国は「北緯38度線」を挟んで対峙しているが、ひょっとして韓国側から北朝鮮に向けてこの曲をトランペットで吹いたら、北朝鮮から反応が・・・?

■ラストは新部隊と新兵器!その威力は?きのこ雲は?■

第二次世界大戦の終盤は原子爆弾をどの国が先に開発し実用化するか焦点になった。今でも北朝鮮はアメリカに対抗するためには核兵器をいかに保持し続けるかがポイントと考えているらしい。それと同じように、架空の時代の架空の都市・津平町も、新兵器の開

発に余念がなかったらしい。そのことは、情報通の板橋煮物屋の店主が当初から「この町にすごい部隊がくるらしいよ」と語っていたことから明らかだ。もっとも、津平町の町長は物忘れがひどいから、喋っている内容は支離滅裂だし、板橋も「何がすごいのですか？」と聞かれると「何かすごいらしいよ」と返すばかりだから、会話のワケの分からなさは全く同じだ。このように奇妙なタイトル、奇妙なセリフ回し、奇妙なストーリーで進んでいく本作は、露木以外の登場人物はすべて“思考停止状態”が際立っている。しかし、よく考えてみると“大東亜共栄圏”の建設という理想を唱えて中国大陆に進出していった旧大日本帝国の国民はかなり“思考停止状態”だったし、戦後、「平和憲法」の幻想の下で平和を76年間も享受し続けている現在の民主主義国・日本の国民もほとんど“思考停止状態”だから、津平町の住民たちと同じようなもの・・・？

そんなことを考えながら本作後半のストーリー展開を観ていると、ある日遂に新部隊と新兵器が登場！楽隊の重厚な音楽とともに登場した新部隊と新兵器は、その設置を終えると、轟音とともに弾を太原町に向けて発射。その数秒後に起きた太原町の光景は？そのすさまじさは、まさに1945年8月6日に広島に投下された原子爆弾と同じ。また、巨大なきのこ雲の姿も同じだ。すると、これで太原町は崩壊？それとも、新兵器には新兵器で報復？そんな新部隊と新兵器の恐ろしさは、あなた自身の目でしっかりと！

2021（令和3）年4月7日記